

巻頭言

追想「図書館」

京都第一赤十字病院 院長
依田建吾

今年には近年には珍しく良く本を読んだ年になりました。かつては年に100冊以上のジャンル不定な本を乱読していましたが、老眼の発現と共に通勤電車の友は本から、iPod に取って代わられていました。昨年の院内健診で聴力が著しく衰えているのを目の当たりし、原因検索の結果、前記の iPod の関与が疑われました。反対に目の方は遠近両用の眼鏡では焦点が合わず自然と本に距離をおく様になりましたが、老眼の進行も止まり、眼鏡を外すことにより近眼のため遠方は見えず、文字ははっきり見え集中力が高まると言う一石二鳥のような事実を発見し、かつて読んだ松本清張の再読から始めました。時代が変わりすぎて推理が推理にならない時もあり思わず電車の中で笑い出し周囲から怪訝な顔をされました。最近はおばちゃん作家の平安寿子にはまっています。

巻頭言のテーマに「図書館に期待すること等」という原稿依頼文を受け取りましたが、とても書けそうもありません。何故なら図書館にはもう30年近く行っていないのでイメージが全く湧いてこないからです。そこで以前も何かの巻頭言に書きましたが、私の中で強

烈な印象として残っている図書館の風景を思い出しながら同じようなことを書きます。老化のなせる業と読み流していただければ幸いです。

私が生を受けたのは敗戦直後の昭和21年、団塊の世代の直前でしたが浪人したため大学以降は団塊の世代として今日まで来ました。学生時代を過ごしたのはベトナム戦争が激しさを増し、日本では70年安保闘争が山場を迎え、学生運動、いわゆる今や歴史の中にしか出てこなくなった全共闘運動が華やかなりし頃で、図書館はその中心にありました。戦後の混乱期から立ち直り、池田内閣の所得倍増計画が完遂する頃で、豊かになりつつあったものの下宿にマイテレビを持っている人は殆ど無く、多くは経済的理由で新聞すらもとれず、図書館の新聞を読み、そこに集まってくる仲間と情報交換を行い、議論をしました。同じ建物にあったのか、近くにあったのか40年以上も前の記憶で定かではありませんが、学生自治会の本部と図書館が一体化してしまっていました。試験中は図書館が勉強の場となり、試験に関する情報収集の場になっていたにもかかわらず、何故か全共闘運動と直結するのは、一つの苦い思い出に結びつき、今考えると暴挙以外の何物でもなかった行動に、一兵卒として加わっていたからかもしれませ

YODA Kengo

(受理日：2012. 8. 29)

ん。封鎖してある建物を出て学内をデモ行進し図書館前の広場で集会するのが毎日のセレモニーになっていたある日、リーダーが突然「図書館を封鎖する」と宣言し実行しました。「本には手を触れるな」という医学生らしい指示があったような気がします、興奮した行動の中で書架が倒された映像が鮮明に残っています。大管法の成立で押さえ込まれ、ある部分が非常に先鋭化したため一般学生から乖離していった全共闘運動の是非を語るつもりは毛頭ありませんが、医学を志していた集団が先人の残した貴重な資料を踏みじめる行為は暴挙以外の何物でもありません。その封鎖は数時間も経ずして思想背景を異にする学生、教職員によりいとも簡単に解除されました。ほとんど抵抗もせず排除されたのは、封鎖した側に「後ろめたさ」があったからに相違ないと思っています。約10年後、再び図書館に入った日、多くの古い書物があるのを見て心底「ホッ」としました。今では新しく大きな建物に生まれ変わった母校の図書館ですが、あの時もし安田講堂のようになっていたら、膨大な医学の歴史を語る数々の書物が失

われ、多くの医学の徒から大切な本と出会う機会を奪ってしまったのではと考え、ひそかに身震いました。そして善きにつけ悪しきにつけ陳腐な表現ではありますが、青春の一ページとなった図書館は殆どが新しくなったキャンパス内で、今も夜間にはライトアップされ歴史を語る資料として静かに佇んでいます。

さてもう一度本題の「図書館に期待する事」を考えてみました。今、必要な文献も自分の机の上のパソコンで検索出来、それを印刷物として手元におくこともすぐに出来る便利な時代になりました。しかし何だか寂しい気がしてなりません。Index Medicus を順番待ちであさり、ほこりで鼻の穴を黒くし、書架から取り出した文献の必要なページをノートに移していた時代が懐かしい。結局、私の図書館は思い出の中だけにあるようですが、最近再び本を読み出した年寄りのための図書館は、あらゆるジャンルの図書が借りやすく、時にはコーヒーを飲みながら、日がな一日過ごせるようなのんびりした憩いの場ではいかがでしょうか？